

知的障害のある児童生徒の 内発的動機づけを重視した授業に関する研究

平成 13 年度～平成 15 年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))

(研究課題番号 13680344)

研究成果報告書

平成 16 年 3 月

研究代表者 竹林地 毅

独立行政法人
国立特殊教育総合研究所

はじめに

この研究では特殊学級や養護学校の先生方の協力を得て、知的障害のある児童生徒の内発的動機づけを重視した授業づくりを追究し、併せて授業研究が児童生徒の主体的な活動や教師の行動に及ぼす影響も検討してきた。

この研究を思い立ったのは、自分自身の経験があったからでもある。初めて特殊学級の担任をしたとき、授業だけでなく学校生活全般で、私の考えるように子どもを活動させよう、あるいは静かにさせようとして、躍起になったことがある。気がつけば、子どもから嫌われ、出勤することさえ嫌になっていた。子どもが思うように動かないので困ったと思っていた。しばらくたって、本当に困っていたのは子ども達で、困らせていたのは私だったことに気づいた。その後も、指導する内容を教科の系統性だけを追って考えようとしたり、かくあるべきと考えた活動に子どもを合わせようとするだけを考えたりして、随分、子ども達を苦しめた。

「教えるべきことは子どものなかにある」「子どもが〇〇ができないから授業ができないというのは、仕事の放棄だ」等、先輩から聞かされた言葉に納得できるまでは、時間がかかってしまった。最近では、子どもの“今の生活”を充実することが、授業を考える出発点であり、子ども達が本当の自信を持つことが授業の目指すところだと考えるようになった。

この報告書には研究協力者の授業実践をまとめた。授業の実例を紹介することで、子ども達にとっても、教師にとっても楽しい授業が実現するための一助となればと思っている。

ご一読いただき、忌憚のないご意見をうかがうことができれば望外の喜びである。

平成16年3月

研究代表者 竹林地 毅

研究の目的及び組織

1. 問題と目的

今後の特殊教育の在り方についての基本的な考え方の一つとして、ノーマライゼーションの進展に向け、障害のある児童生徒の自立と社会参加を社会全体として、生涯にわたって支援するということが述べられている（21世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議，平成13年1月）。知的障害のある児童生徒の自立と社会参加をめぐることは、従来の周辺生活の自立や職業生活の自立を中心とする考え方から知的障害者本人の自己決定を重視する考え方が広がってきている。つまり、これからの自立観として、制度や他者の援助を受けながら自分の生き方や援助の在り方を自らの責任で決定していくことが大切だと考えられるようになってきている。また、現在、進行中の障害者福祉の構造改革においても、措置制度から利用制度へと制度が変わることで、本人との契約であるセルフマネジメント、つまり本人の自己決定と自己決定を支援するケアマネジメントの在り方が課題となっている。

今後、ますます、ノーマライゼーションの進展に向けた知的障害のある児童生徒の自立と社会参加の支援として、知的障害のある児童生徒の自己決定を支援する教育内容づくりが重要な課題になっていくと考える。

知的障害のある児童生徒の自己決定を支援する教育内容づくりとして、主体的な活動を促す授業づくりが課題となっており（香川，竹林地他 広島県立教育センター研究紀要第24号1997年），授業構成においては、内発的動機づけを高めるため児童生徒の「有能感」「交流感」「自己決定感」を充足することが主体的な活動を発現させる（香川，竹林地他，広島県立教育センター研究紀要第25号1998年）と考える。しかし、児童生徒の「有能感」「交流感」「自己決定感」を充足する手だての検討は、学習障害児を対象として、児童生徒の動機づけられ方を①自発的-内生的動機づけ（典型的な内発的動機づけ），②他発的-内生的動機づけ，③自発的-外生的動機づけ，④他発的-外生的動機づけ（典型的な外発的動機づけ），⑤脱動機づけ，の5タイプに分けて考察した研究（川村秀忠 秋田大学教育学部研究紀要1995年）があるが、知的障害教育においては十分な検討がなされていない。

知的障害教育における授業研究については、動機づけの機能を①初発的機能：行動を起こさせ、続けさせ、ある時点で終わらせるはたらき，②志向的機能：行動をある目標に方向づけるはたらき，③調整機能：目標を獲得するために必要な部分行動を選択したり，順序づけたりするはたらき，④強化的機能：ある行動が完結した際，この行動をもう一度繰り返そうとする傾向を高めたり，低めたりするはたらき，の4機能に分類し，教師と児童の行動を評定し，授業構成を「教師主導型」「子ども主導型」「矛盾型」に分けて考察した研究（田口則良，国立特殊教育総合研究所研究紀要第1号 1974年）や「発見型授業」と「説明型授業」の比較による研究（田口則良，教育心理学研究第26巻第1号. 1978年）等がある。授業構成のタイプにより様々なメリットとデメリットがあることが報告されているが，多様な状態の児童生徒が存在する知的障害教育において，内発的な動機づけを高める指導法の追究がなされる必要があり，そのためには，内発的動機づけを重視した授業構成が児童生徒の変容に及ぼす影響の検討が必要だと考える。

また，教師の指導力の向上のための授業研究の在り方については，授業の価値的側面を分析，評価するための授業批評の在り方を論じた研究（太田正己，京都教育大学研究紀要. 1992年）や授業の指導目標や教材の適切さから授業を分析した研究（太田正己，京都教育大学研究紀要. 1995年）がある。

この研究は，ノーマライゼーションの進展のための課題の一つとして考えられる知的障害者の自己決定とその支援に関して，知的障害教育における指導方法について提言をしようとするものであり，内発的動機づけを重視する立場から授業構成の在り方を追究するとともに授業研究の在り方についても実際的に明らかにすることを目的としている。

2. 研究組織

研究代表者 竹林地 毅

国立特殊教育総合研究所知的障害教育研究部重度知的障害教育研究室長

これまで以下のような研究を行ってきた。

- 広島県教育実践研究成果報告書 1995年4月～1996年3月「小学校障害児学級における一人一人に応じた指導内容・方法の工夫」, 竹林地 毅他
知的障害特殊学級の授業実践の検討から次の点が明らかになった。
 - ・教師が児童との共感を大切にすると、児童の意欲が高まり主体的な活動が促される。
 - ・教師が児童を「できる存在」としてとらえられるようになると、児童との関係が変容する。
 - ・知的障害特殊学級としての集団活動を充実するため、活動内容の共通化を図る工夫が必要である。
 - ・生活単元学習では、児童の課題意識にそった活動の展開がなされるよう構造化する必要がある。また、遊びの指導では、活動の展開をパターン化して繰り返すなかで、主たる遊びの活動の時間を多くとれるよう工夫することが大切であり、教師が児童一人一人の集団参加に関する課題やイメージをもつこと等の活動のめあてを明確にもつ必要がある。評価においては、活動そのものの評価と教師のめあてに対する評価をしていく必要がある。
- 平成11年度科学研究補助金（奨励研究（B））1999年4月～2000年3月「知的障害児童生徒の主体的な活動を促す授業づくり」, 竹林地 毅
児童生徒が自ら課題を設定し、活動自体が目的となるような授業づくりの在り方及び教師自身の内面に焦点をあてた授業研究の在り方について検討し、次の点が明らかになった。
 - ・児童生徒の主体的な活動を促す課題設定の要件として、児童にとってわかりやすく必要感があり達成感のある活動であるだけでは不十分であり、生の本物の体験であることが重要である。人工的な環境設定のなかでの活動では、本物の自信にはなりにくい。
 - ・児童生徒が伸び伸びと活動できるための支援の要件としては、教師もともに活動することで児童生徒に安心感と喜びをもたせること、児童生徒の気持ちをとらえて、活動のイニシアティブを児童生徒がもてるようにしていくことが大切である。
 - ・授業研究において、教師の児童生徒の気持ちへの気づき、教師自身の気持ちへの気づきを検討していくことが重要である。
- これらの研究と関連して、「自己決定の支援に関する研究」（広島県立教育センター研究紀要第24号 1997年）、「主体的な活動を促す授業づくり」（広島県立教育センター研究紀要第25号 1998年）により、自己決定とその支援の在り方について整理し、支援者である教師とのコミュニケーションの深まりを基盤とした主体的な活動を促すことを課題として、内発的動機づけに基づく授業づくりについて検討してきた。

研究協力者（所属はいずれも該当年度）

青森県三戸郡三戸町立三戸小学校（特殊学級） 教諭 尾形成子（平成14年度）
横浜市立市沢小学校（特殊学級） 教諭 福岡いつみ（平成13年度～14年度）
横浜市立希望ヶ丘小学校（特殊学級） 教諭 中村貞二（平成13年度～15年度）
横浜市立別所小学校（特殊学級） 教諭 荻原規彦（平成13年度）
福山市立新涯小学校（特殊学級） 教諭 通堂（平成13, 15年度）
広島市立三篠小学校（特殊学級） 教諭 小早川知代子（平成13年度～15年度）
北九州市市立大蔵小学校（特殊学級） 教諭 鋤崎政彦（平成14年度）
東京都立あきる野学園養護学校（高等部） 教諭 菊地直樹（平成13年度～15年度）
神奈川県立茅ヶ崎養護学校（高等部） 教諭 福岡淳子（平成14年度）
北九州市立小倉南養護学校（高等部） 教諭 島田雅宏（平成13年度）

3. 研究経費

本研究に交付された研究費は、以下の通りであった。

平成13年度	1,800千円
平成14年度	500千円
平成15年度	600千円
計	2,900千円

4. 研究発表等

〈口頭発表〉

・平成14年度

竹林地 毅：知的障害のある児童生徒の内発的動機づけを重視した授業に関する研究。日本特殊教育学会第40会大会発表論文集。

〈講義・講演〉

・平成13年度

竹林地 毅：特殊学級における授業研究の実際。平成13年度国立特殊教育総合研究所短期研修知的障害教育コース講義資料

・平成14年度

竹林地 毅：特殊学級における授業研究の実際。平成14年度国立特殊教育総合研究所短期研修知的障害教育コース講義資料

竹林地 毅：子どもの内発的動機づけを重視した授業づくり。平成14年度福島県養護教育センター研修講座講義資料

・平成15年度

竹林地 毅：特殊学級における授業研究の実際。平成15年度国立特殊教育総合研究所短期研修知的障害教育コース講義資料

竹林地 毅：養護学級における授業分析。平成15年度北九州市立養護教育センター研修講座講義資料

竹林地 毅：子どもの思いを実現し、自信を育む授業。平成15年度金沢市教育センター研修講座講義資料

竹林地 毅：子どもの思いを実現し、自信を育む授業。平成15年度広島県立広島北養護学校中間報告会講演資料